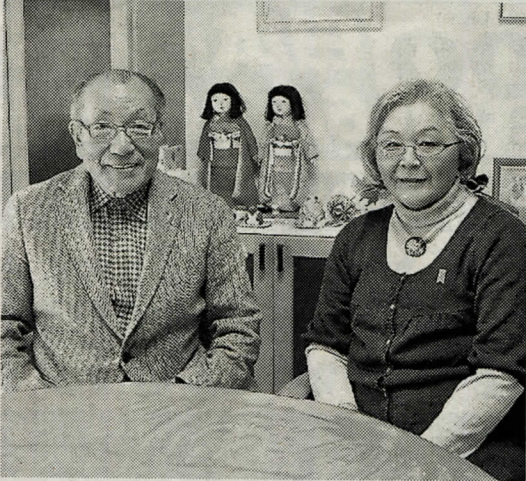


# 拉致被害者支援「救う会・群馬」

# 活動10年目、解決期待

北朝鮮による拉致被害者を支える群馬での活動が、20日で10年目に入った。金正日総書記の死去が報じられ、「救う会・群馬」事務局長の大野敏雄さん(75)、代表のトシ江さん(78)夫妻は、早い問題解決を期待している。

## 大野さん夫妻



「市民活動のノウハウはまったくなかったが、横田夫妻を支えたいという純粹な気持ちだけでここまで続いた」と話す大野トシ江さんと敏雄さん夫妻。前橋市三保町1丁目自宅

## 横田さん夫妻と深い縁

「もう誰にも、こんな悲しみを味わってほしくない」  
拉致被害者、横田めぐみさんの母、早紀江さん(75)の言葉が会場に響いた。11月、高崎市であった横田滋さん(79)夫妻の講演会。「救う会・群馬」などが運営した。  
滋さんは1988、91年、日本銀行前橋支店に勤めていた。クリスマスチャンだつた早紀江さんは市内の教会に通い、トシ江さんと出会った。  
めぐみさんを77年に拉致された早紀江さんと、その前年に高校生だった娘を亡くしたトシ江さん。同じ悲しみを抱えた者同士、心が通い合った。  
2002年12月。地元メディアに早紀江さんと友人関係にあることを紹介されると、その日は家の電話が鳴りっぱなしだった。

「私たちにも何かできることはないか」。滋さんが通っていた床屋さん、ボランティアに熱心だった早紀江さんと交流があった老人ホームの関係者……。見ず知らずの人たちからだった。夫婦で支援組織を立ち上げようと決意した。  
「ど素人による運営だった」と振り返る敏雄さんは、もともと地方銀行の行員。トシ江さんは専業主婦。最初は、講演会を開くのに、会場の予約の仕方、音響設備や照明のレンタルに費用がかかることも知らなかった。

県の救う会に認定されたのが03年。全国幹事会に招かれたとき、隣に早紀江さんが座っていた。早紀江さんは「大野さんが群馬にいてくれることが慰めになる」と笑顔を見せた。岩手県の支援者は「あんなに笑った早紀江さんを見たことがない」と漏らした。  
敏雄さんは「最近、拉致問題に対する国民の関心が薄れている気がする」と不安に思っていたが、金総書記の死去に「志ある者が国を変えようとする動きを見せるかもしれない」と期待する。

「私たちに何かできることはないか」。滋さんが通っていた床屋さん、ボランティアに熱心だった早紀江さんと交流があった老人ホームの関係者……。見ず知らずの人たちからだった。夫婦で支援組織を立ち上げようと決意した。  
「ど素人による運営だった」と振り返る敏雄さんは、もともと地方銀行の行員。トシ江さんは専業主婦。最初は、講演会を開くのに、会場の予約の仕方、音響設備や照明のレンタルに費用がかかることも知らなかった。  
県の救う会に認定されたのが03年。全国幹事会に招かれたとき、隣に早紀江さんが座っていた。早紀江さんは「大野さんが群馬にいてくれることが慰めになる」と笑顔を見せた。岩手県の支援者は「あんなに笑った早紀江さんを見たことがない」と漏らした。  
敏雄さんは「最近、拉致問題に対する国民の関心が薄れている気がする」と不安に思っていたが、金総書記の死去に「志ある者が国を変えようとする動きを見せるかもしれない」と期待する。  
の被害者にも同じ思いで支援してきます」と話している。(木村浩之)